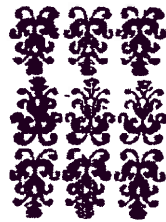


17世紀イングランド常備軍論争(8)

藤原 浩一

A
L E T T E R
T O A
Member of Parliament
C O N C E R N I N G
The four Regiments commonly called
M A R I N E R S.



L O N D O N,
Printed for *A. Baldwin* in *Warwicklane*, 1699.

一般に海兵隊¹と呼ばれている四連隊に関して、ある下院議員への手紙

千六百九十九年

ロンドン、ウォーウィックレーン、A. ボールドウィン出版

(3)

一般に海兵隊と呼ばれている四連隊に関して、ある下院議員への手紙

拝啓

先の手紙で²私は海兵四連隊の常備編成が国民にとって無益な負担となり、海軍にとって迷惑であり、王国の自由にとって危険なものとなることを示そうとしました。

そしてそのために私は以下の四点を前提として述べます。

第一に、私が証明したように、七千人は近衛兵や要塞守備隊としては多すぎますし、結果として先の議会ではこれらの海兵隊をもっぱら海軍の軍役にのみ割り当てることを決定したので陸上戦力としても不要であり、その目的にも利用できません。

(4)

第二に、すべての国はあらゆる職業と同様に多くの水兵を育成するでしょうし、通常の平時の海軍の業務は安定した雇用先を用意することになります。というのはウィリアム・ペティ卿³が述べておられるように水兵の賃金は一般労働者の三人分に相当します。したがって、もしわが国の航海条例が適切に遵守されれば、人々は当然のことながら供給過剰になって、生計をたてるために他の職を求めることになるまでは、きわめて収入の多い雇用先を得ることになります。これはこの職業ばかりでなくあらゆる職業においても真実です。

第三に、ある国において戦争、またはその他の原因によって軍艦に必要な以上の水兵が養成され、余剰となった人員は他の職業に就くか、新しい国を見つけ出すか、乞食となるか、盗みをするか、もしくは餓死することになります。それが現在のイングランドの状況だと思えます。というのは戦時中われわれは海軍に四万人から五万人を維持してきました。そして現在、わが国は一万人以上は雇用していません。したがって艦隊で養成された四万人近くの人々は他の場所で生計を立てなければなりません。そして現在は何千人も

の水兵が生活の糧が得られずに惨めに不平を訴えています。

第四に、これら二つの事情から当然ながらこの海兵隊の常備編成は水兵にとって好ましい養成所とはならず、むしろ反対になります。すべての状況においてそうなると言っているわけではありません。というのはおそらく水兵の需要が非常に多い戦時であったり、または海事問題を先導しているような国においてはそのような連隊は陸上の人々を海に引き寄せるためには有用かもしれません。未熟な水兵でも一人もいないよりはましですから。しかし反対に、海事に十二分に精通し、必要以上の水兵がいるような国では、そのような

(5)

常備編成は水兵を養成するにはほど遠く、かれらは雇用の機会を埋め、賃金を受け取り、実際に養成された水兵の雇用を妨げています。

ここまで前提を述べた後で、私の意見における疑問点は海兵が同数の水兵より優れているかどうかです。すなわち一万人の水兵と三千人の海兵が一万三千人の水兵よりもこの王国にとってより有益だと言えるのか、というものです。

さて、私は反対であることを示してみましよう。

まず第一に、水兵と海兵の間には独特の嫌悪感があります。習慣が異なるとか、作法が異なるとか、命令指揮系統などが異なるとか。ウィリアム・ペティ卿が述べておられるように「海兵が関与した成功事例について水兵は心からは喜ぶことはありません。惨めで苦痛に満ちて骨の折れる仕事（それでも国家にとっては有益なものですが）について育った連中は、戦利品を獲得したときに陸上の兵士に関連して動きを妨げられて邪魔されると考えたり、彼らどうして陸上の兵士と同じ割合で分かち合わなければならないと考えるとき、心からは喜ばません。」⁴これが真実であることは先の戦争で遺憾なく発揮されました。当時海軍軍人と陸軍軍人は長い航海をともなう遠征と一緒に派遣されることはありませんでしたし、彼らの相違はつねに彼らが派遣された作戦を台無しにしました。とくに西インドへ派遣されたフランシス・ホウィーラー卿⁵によって指揮された軍団においては海軍士官と陸軍士官との間の憎悪が極端に悪化し、遠征作戦全体が不首尾に終わり、数千人と巨額の資金が失われました。

(6)

第二に、海兵の給与はそのような使われ方をされるかぎり同数の水兵の三分の一ほど高

くつきます。というのは船上の海兵は水兵の給与を受け取り、そのうえ士官の給与は二万九百三十三ポンドにたっします。これは王国にとって無駄な費用です。士官はめったに部下と共に航海に出ることもありませんが、いっしょに航海に出れば水兵にとって邪魔になるだけです。そして彼らは艦隊内で派閥をつくります。たとえ彼らが海軍の司令官と合意するようなことがあったとしても彼らは無用であるばかりでなく海軍の司令官を墮落させるだけであり、任務の遂行を妨げるだけです。

第三に、彼らの陸上での規律は海軍の規則と衝突することが多く、艦隊の士官たちに有害な考えを吹き込むだけです。それまでは海軍士官が知らなかったような、誤った評価方法や誤った点呼とか他の悪習を吹き込んでしまいます。そして海軍本部委員によってしばしば告げられたことですが、あらゆる海軍の規則と秩序を破壊した常備編成だとして海軍本部委員会は常に海兵隊の常備編成に反対しました。そして海軍本部委員となったある紳士は彼らを海ネズミと呼んで公然と嘲ったのです。そしてこれらの哀れな人々は衣服や食料がなく餓死させられました。実際にかれらはいつも国家でもっとも惨めな人々でした。

第四に、陸者を水兵にする代わりに彼らは水兵を陸者にしてしまいました。海兵が水兵になるよりも、より多くの水兵がそそのかされて海兵になりました。そして士官は海兵を徴募すると一人あたり四十シリングを受け取ったのです。それでも艦隊に強制的に徴用された人々はそのような条件で上記の連隊に組み込まれ、支払われた金額は士官自身の懐に

(7)

入ったのです。

第五に、かれらは上陸すれば内陸地域で宿営させられて海軍にとって、また国民にとって負担となります。またこのことはしばしば建議され、常備編成のひとつがそれを必要としたにもかかわらず海軍工廠ではなんの仕事もする義務がありませんでした。そして実際、いくつかの常備編成が創設されましたが、その一つさえ注意を払われることはありませんでした。そしてなかには非常に意地悪く、これを発明した貴族が自らどれかの連隊長になる以外には何の意図もなかったというものもいます。

第六に、かれらは「常備軍」について書かれたいくつかの論文で十分に証明されたように王国の自由にとって危険です。すなわち少数の軍隊でも国家の自由を破壊できるだろうし、破壊してきたといういことを反論が不可能なばかりに示しています。イングランドで召集されればただちに陸上部隊となる海兵の他にわが国王は近衛兵と守備兵七千人をもち、アイルランドに一万二千人、スコットランドに五千人、そしてオランダに六千人近く、合計で三万三千にもものぼる軍隊を持つとき、どれだけ容易なことでしょう。危険で恐

るべき兵力です。そしてわが国の（別人の表現を使わせていただければ）変節者のホイッグはどの治世においても、大臣ではなかったとしても、国家を隷属させるには十分な兵力だと思ったことでしょう。

これらの不都合さと釣り合いがとれるほど海兵が同数の水兵よりも国家に対してどれだけ有利なものなのか、そして海軍に水兵がなれていないような常備編成を導入したことを正当化できる理由を示していただきたい。

(8)

私はそれにたいして笑いやあざけりを招かずにはなんの理由も、いやむしろ言い訳というべきものを耳にすることはできないことを示さなければなりません。また私は本気で反論したくもありません。その題目自体があざけりの対象ともならないものなのです。これらの紳士がたや彼らの理由はそれ以下ですが。

理由その一。

給与の支払いを受けている海兵連隊は緊急事態や勃発の事件にはおそらく召集の時間にかかる水兵よりも態勢が整っているでしょう。

返答。

私は以前に提案しましたが、これらの海兵のかわりに同数の水兵を用いるべきだと思います。（そうすれば王国にとって経費が三分の一以上も節約されることを示しました）それから実際に乗船している水兵は大部分がいつも陸上にいる海兵と同様に態勢が整っていると言えるでしょう。

理由その二。

これらの海兵は水兵のかわりにはなりません。軍艦には水兵が乗り組まなければなりません。そしてこれらの海兵はただのおまけになります。

私はこの主張に対して反論することを免除させていただきたく思います。⁶このような新しい理由づけをされる紳士がたが自らすすんで自分たちの主張する海兵は同額の給与の

支払いも受けず、同量の肉も食わず、同数のハンモックで寝ることもないと示していただけるまでは。要するに飲み食い、立ってしようと、横たわってしようと、座ってようと

(9)

と、あたかも自分たちがより優れた水兵であるかのように同様な場所を占めるようなことがないと示していただけるまでは。個人的意見ですが、かれらは水兵が慣れ親しんでいる居住施設に満足しないでしょう。とくにしゃれものの士官たちは自分たち専用の船室を割り当てられなければ冷遇されたと感じるでしょう。

理由その三。

敵陣に対する攻撃には十分な訓練を受けていない水兵よりも海兵の方がふさわしい。

返答。

われわれ自身の経験はこれに反しています。というのは彼らは一緒に運用されてきましたが、先の戦争で陸上の勤務についたとき、すなわちコーク包囲戦⁷において、グラフトン公爵⁸指揮下の戦闘において少数の水兵が当時、またそれ以後も海兵全体よりも勇敢で有効な作戦を実行しました。しかし、もしかれらの言葉が真実であるとしても、今は戦争もないので敵陣に攻撃を加えることもありません。そしてわれわれは、いつとも分からぬその時まで、またどこへ派遣されるかもわからないまま、何をすべきかも分からないままに海兵隊を維持するために莫大な費用を負担しなければならないのでしょうか。さらにそのような目的のために海兵隊は使用されたことがあるのでしょうか。そしてこの八年戦争においてまったく試みられもしなかったことに今後どのような理由を信じろといわれるのでしょうか。しかしもしこれが実行可能であるとすれば、われわれはいつでも地上軍を船酔いがさめるまで船上にとどめておくことによって、そのような軍役に適するようになるでしょう。

(10)

理由その四。

海兵連隊はわが国の船舶を守るには水兵よりも適切である。そして射撃で敵に損害を与えるためにはより適している。

返答。

水兵は地上軍よりは射撃がうまいと評判です。というのは海上での勤務だけでなく、航海において、そして彼らが寄港するいくつかの港で実際に野鳥を射撃することによって生涯武器になれ親しんでいるからです。しかしもしこれが真実でなければ、「海兵隊」という言葉に本質的な美徳があると考えない限り彼らを交代で乗船させて海上訓練をつませるだけになるかもしれないでしょう。そして私がすでに述べたように、これもまた実用的ではないというのであれば、あらたに戦争が勃発したときには地上部隊は、ナマコが食べられるようになるまで船に留めておけばの話ですが、いつでもその目的に整えられます。

理由その五。

海兵が海上で執行する軍役の他に陸上では国王の海軍工廠で働くことによって有益となるでしょう。

返答。

海兵の常備編成の目的は彼らの一定数を陸上に、残りを海上に配置することだと思われまます。そしてその数がどれほどであれこの主張にとっては同じことです。すなわち、三分

(11)

の二は常に海上にあり、そして三分の一が交代で海軍工廠で勤務することになります。さて私がすでにお示ししましたように、海上にいる三分の二の海兵は経費が多くかかるばかりで、同数の水兵ほどには役に立ちません。そしてもし陸上の三分の一が同数の技術兵と同様な経費がかかり、それほど有用ではないとすれば、彼らは海上でも陸上でも役に立たないので、結論としては彼らを解散させるべきです。

私は、それらの常備編成では陸上での彼らの給与は一日八ペンスに過ぎないことは知っています。しかし彼らが全時間を重労働についやし、他の仕事ができないということなら、彼らを海上に派遣するときと同様に給料が増額されるでしょう。それはついでなが

ら、兵士が守備隊とか他の場所で勤務させられるときにはつねに行われることです。このようなやりかたをするなら彼ら自身の給料は通常の労働者を雇うのと同じかそれに非常に近いものとなるでしょう。しかし彼らが給料を増額しないとすれば、私が以前に示したように、士官の給与は全中隊の定員が充足されているとすれば連隊の給与総額の三分の一以上になるでしょう。それほどまでに正直な紳士がたがなさるとはどうてい思いませんし、まことに不適切な考えではありますが、もしも彼らが偽りの名簿を作成されるようなことがあれば、⁹ そうすれば士官の給与はおそらく給与総額の半分にもなるでしょう。そうするとこれはまるがかえであり、かれらの給与は通常の技術者よりもずっと高額になるでしょう。そうなったときの問題は、とりたててなんの訓練も受けずにただ無原則に魚、鳥、ラッコ、海草などをとって育った人たちを集めただけの海兵の方が、若いときからなれ親しんだ自分たちの仕事をしている熟練者よりも国王の海軍工廠では役立つ仕事をするということになります。これに対しては何の返事もできません。

(12)

しかし士官たちは海軍工廠で何の仕事があるのでしょうか。彼らも同様にそこで働くことになっているのでしょうか。それともかれらは、まったく経験のない仕事をしてただ職人の邪魔をしているだけの兵士たちを見まもるだけなのでしょうか。実際にこの問題がこれほど重大でなければ、これらの紳士がたはわれわれをととても楽しませてくれるでしょう。

理由その六

これらの海兵は国王の海軍工廠で働くことに加えて、あらゆる奇襲攻撃から国民を守るでしょう。

返答。

彼らの援助は必要ありません。というのは新しい技術が導入されていなくても国王の海軍工廠は世界中で一番効率的に管理運営されているからです。

第一に全ての海軍工廠を防衛するために何隻かの護衛艦（私は三隻と思います）がいます。

護衛艦の他に通常の任務を果たす一定の数の兵士がすべての船に乗船しています。

すべての監視船、偵察艦はそれぞれの船にきちんと任務を遂行させるために送り出さ

れ、そして監視がきちんと実施されているかを見守っています。

すべての海軍工廠にはそのように危険の接近を知らせるために常設の監視兵が（十六人だと思いますが）います。そして鐘がならされるとすべての職人と水兵は防衛のために海軍工廠の士官のもとに出頭します。このようなときに海兵を使用しても一人の人間も増えることはありません。というのはその場合にはちょうど同数の他の職人を解雇しなければならないからです。

(13)

それぞれの海軍工廠の常備編成についていちいち語っても退屈なだけでしょうから手短かに述べることにします。すなわち国王の海軍の編成、とくに海軍工廠の編成は世界でもっとも立派なもので、その管理運営体制のもとでわれわれはわが国自身の防衛にあたってきたばかりでなく、世界中を打ち負かし、長年海を支配してきました。しかしこれらの新しい政策が好まれたしてからわが国にどのような利益があったのでしょうか。海軍本部委員の方々が一番よくご存知でしょう。

実際に、私が反対している紳士がたの誠実さが、もしわれわれが理解しているものとは異なるのなら、彼らはこんな調子であざけり攻撃するようなことはなさらないでしょう。国王の海軍工廠で働かせるか、防衛のためにどのような顔をして彼らを使おうと主張されるのでしょうか。彼らはそれらのどちらかの目的にでも八年戦争中に海兵隊を使用したことがあるのでしょうか。平時よりもずっとそのような機会は多かったでしょうに。そしてどのような理由で海兵隊がそれをいま達成できると信じられるのでしょうか。しかし海兵連隊を設立するためには何でも主張し、何でも実行しなければならないのでしょうか。戦争についてのポリュビオス¹⁰の意見として、「真の理由は常に隠蔽され、もっともらしいものが提示される」という言葉があります。

海兵連隊の設立はオランダでは無意味だと見なされました。その結果この冬にオランダでは海兵連隊を拒絶したのです。そして明白なことですが、わが廷臣たち自身が、どのように装ったとしても、私と同様に海兵をあまり重要ではないと考えています。というのも彼らは八年戦争において訓練された古い連隊を解散しました（それはもし海兵が何らかの役に立つものであったなら、その当時役に立てられていたことでしょう）。そして士官の三倍近い数の地上連隊をいくつか彼らの代わりに海兵連隊という名前で召集していたでしょう。そしてこれら新米の水兵はそれまで航海に出たこともなく、ずっと陸上にとどめおかれ、下院の明白な反対にもかかわらず内陸部のいたるところに駐屯させられました。

(14)

その結果、現在の議論はすでに設立された常備編成を解散させるべきかどうかではなく、平和時に新しい常備編成を設立するべきかどうかについて論じるべきです。

私見に過ぎませんが、どこかの廷臣がその編成を地上軍の連隊として計画していたのではないのでしょうか。そして外見のみにとられる無知な連中をだますために彼らに新しい名前をつけただけなのではないのでしょうか。しかし国民の守り神であり名誉あるあなたがた下院議員は外国軍の侵略というこけおどしによって脅されることもなく、また官職の誘惑によって道をあやまることもなく、偽りの外見にだまされることもないことを全世界に示していただきたく思います。また下院議員はどれほど陛下を尊敬し、崇敬すべきかを知っておられ、退廃して邪悪な大臣を罰することができます。手短に述べれば、下院議員はイングランド国民と隷属的なフランス国民との違いを知っておられます。

「騙されたい人は騙されなさい」

終わり。

最近出版されたパンフレット「次に起こるかもしれない危険と、平和時に地上軍を維持する必要性との釣り合いを考える手紙」¹¹に対する反論。

価格六ペンス。A・ボールドウィン販売。

あとがき

これは *A Letter to a Member of Parliament concerning the Four Regiments commonly called Mariners*. London, 1699 の翻訳です。例によって著者名は不明ですが Lois G. Schwoerer によれば 1699 年 1 月に出版されたものとされています (“Chronology and Authorship of the Standing Army Tracts, 1697-1699,” *Notes and Queries*, new series, 13 (no. 10): 382-390.)。

また同一の著者によるものと思われる前作はワイト島のニューポートから送付されたとされています。

これまでは平和時における常備軍維持反対論が主として地上軍に関するものでしたが、このパンフレットは海兵隊の常備編成に反対するものです。しかし平時においても海軍力

自体の維持については自明のこととして一切反対は表明されていません。

このパンフレットでは主として海兵隊の新增設に反対の意見が主張されていますが、逆に言えば当時の政府があらゆる手段を用いて軍備の維持、増強に努めようとしていたことが想像できます。ちなみに海兵の役割は主として地上戦に移りつつあった時代でしたが、航海中の船内警備、取り締まりの役割も担っていたので、一般水兵もあまり好ましく思っていなかったことが記されています。

注

- 1 原文は MARINERS であり、この場合は *OED* にそのままの文例が示されている。
 † 2.2 spec. “A fighting man on board ship; a marine.”
 a 1642 Sir W. Monson *Naval Tracts* I. (1704) 214, “500 Men at Sea, whereof 340 Mariners, 40 Gunners, 120 Sailors.” 1699 (title) *A Letter to a Member of Parliament concerning the Four Regiments commonly called Mariners*.
- 2 *A Letter to a Member of Parliament concerning Guards and Garisons*[sic]. Lois G. Schwoerer によればこれは 1699 年 1 月に出版されたが、“Tract sent from Newport in the Isle of Wight.”と本文の最後に記されている。*Notes and Queries*, new series, 13 (no. 10): 389.
- 3 Lord William Petty サー・ウィリアム・ペティ (1623 年 5 月 27 日 - 1687 年 12 月 16 日) は、イギリスの医師、測量家、経済学者。労働価値説を初めて唱え、また、政治算術派の先駆となったことから、古典派経済学と統計学の始祖ともいわれる。ハンプシャー州生まれ。オックスフォード大学の解剖学教授やアイルランドの軍医総監などをつとめた。子孫はホイッグ党 - 自由党の名門ランズダウン侯爵家として現在も続いている。『ウイキペディア』。
- 4 *Political Arithmetick*, p.57. William Petty 死後 1690 年に出版された。正式な題名は、*Political Arithmetick, or A Discourse Concerning, the Extent and Value of Lands, People, Buildings; Husbandry, Manufacture, Commerce, Fishery, Artizans, Seamen, Soldiers; Publick Revenues, Interest, Taxes, Superlucartion, Registries, Banks; Valuation of Men, Increasing of Seamen, of Militia's, Harbours, Situation, Shipping, Power at Sea, &c. As the same relates to every Country in general, but more particularly to the Territories of His Majesty of Great Britain, and his Neighbours of Holland, Zealand, and France*.
- 5 Sir Francis Wheler もしくは Wheeler (1656 - 1694)。英国の海軍軍人。ジェイムス

二世によってナイトに叙せられたが名誉革命以後も海軍軍人として指揮を執った。彼の西インド遠征は失敗に終わった。1694年2月、ジブラルタル近海で乗り組んでいた軍艦が嵐のため難破し、彼も溺死した。

- 6 ここで言明されているように「理由その二」に対する「返答」はない。
- 7 Siege of Cork, コーク包囲戦。イングランド王位奪還を目指すジェームズ二世軍がアイルランドに上陸し、1690年9月にウィリアム三世軍に包囲され、降伏した。ジェームズ二世は後にフランスへ逃亡した。WIKIPEDIA.
- 8 Henry FitzRoy, First Duke of Grafton, グラフトン公爵 (1663-1690)。チャールズ二世の庶子。1688年の名誉革命ではウィリアム三世を支持し、ジェームズ二世に対抗した。ジェームズ二世のアイルランド侵攻の際にはウィリアム三世軍の指揮官としてコーク包囲戦に参加し、負傷し死亡した。彼は1684年にワイト島総督ロバート・ホームズ提督 (Sir Robert Holmes, 1622-1692) が兵員名簿偽造容疑で告発されたとき、後任に指名されたことがあったが、ホームズ提督は無罪となり、1692年に死亡するまで総督職にとどまった。WIKIPEDIA.
- 9 注7のように、現実にワイト島総督ロバート・ホームズ提督が兵員名簿偽造容疑をかけられた事例があるので、あてこすりの意味を含んでいる。ヨーロッパの傭兵の歴史では兵員名簿偽造は伝統的事実であった。池良生『傭兵の二千年史』講談社現代新書、2002年、98頁参照。
- 10 Polybius ポリュビオス (c205-c123B.C.) : ギリシアの歴史家; *Historiai* 『歴史』 (40巻。ローマの世界統一を叙述)。
- 11 *Letter, Balancing the Necessity of Keeping a Land-Force in Times of Peace, with the Dangers that May Follow on It.* John Somers, Lord Chancellor (1651-1716) が1697年11月に発表したと言われている。当時のヨーロッパ情勢を鑑みて、平時にも常備軍の必要性を説いたもの。